



代の中国系カナダ人、特に香港からの移民2世が多く、1960年代以降カナダで行われた多文化主義制度のシンボルの1つである。1980年代頃から多くの富裕な香港・台湾系移民がこのエリアに移っており、これとともに中国系の商売店やレストランも増えている。



カナダの多元文化、特に先住民文化と民俗を全面的に展示するのは人類学博物館である。人類学博物館はブリティッシュコロンビア大学の中に1949年に設立された。この博物館の北西沿岸の先住民コレクションは非常に名高く、トーテムポールをはじめ、マスクや生活道具など圧倒的な展示数、収蔵品数を誇る。

2 和歌山県人のスティヴストンへの定住¹

カナダの多元文化を代表するもう1つは、スティヴストンに移民して来た日系人である。日系人の大部分は1890年代から1920年代にかけてカナダへ来て、1905年から1907年にかけて頂点に達した。初期の移民は、ブリティッシュコロンビアで材木業や鉱業、漁業、農業などに従事した。1907年にはハワイからの転航者の急増と日本からの移民が増加したため、バンクーバー暴動が起き、日本人移民の制限のためにレシュエ協定が結ばれた。新移民は年間400名に制限され、すでにカナダに居住している者の妻子、両親は枠外となったため、日本人移民も妻子を呼び寄せて、定住に向かうこととなった。これが反日感情を大きく刺激することになった。1928年までには、日本移民は年間150名にまで制限されてしまった。

和歌山県の移民は日高郡三尾村出身の工野儀兵衛が

1888年にカナダに渡りフレザー河に上る鮭をみて、故郷の人々を呼び寄せたことに始まると言われている。1912年にはカナダにおける日本人人口で和歌山県人が2位を占めるようになる。明治40年代の初めには、バンクーバーやスティヴストンにはすでに各種の日本人の組織ができ、確固たる日本人社会が形成されていた。

スティヴストンの和歌山県人の独立業者のほとんどは漁業従事者である。当時の日本人漁者はすでに熟練業であり、カナダに帰化してライセンスを取っている者も多く、缶詰会社も白人漁夫やインディアン漁夫よりも優先して使用した。日本人漁師は最初プーラーから始め、やがてライセンスを取ってネットマン、そして船持ちへと発展した。漁師の大半は一生漁師であった者が多く、商売人に転向した者は多くはない。スティヴストンの日本人漁者の中には明治末期にはすでにガソリン船を所有する者も出てきていた。しかし大正期に入ると、塩鮭の日本への輸出、バンクーバー島での鯨漁は日本と中国への輸出を行う業者が増えてくる。この時期は和歌山県人の大半はスティヴストンを中心にして漁業をしていた時期であると言える。



今日、和歌山県の漁民の二世、三世の日系人はまだスティヴストンに残っているが、漁業に従事する人は少なくなっている。しかし、日系人がもたらした日本文化はカナダの多元文化へも影響力を失っていないと思われる。

今回は時間の制約もあり、十分な資料を収集することができなかったが、これから、研究を深めていきたい。

1 佐々木敏二、「日本人カナダ移民史」、1999.8、不二出版株式会社

戦後ドイツにおけるモンゴル学研究 ワルター・ハイシッヒとヘルマン・コンスタンの功績を追い求めて

白 莉 莉
(歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)



2012年5月2日から派遣研究員として3週間ドイツのハイデルベルク大学を訪問した。派遣研究先にドイツを選定した理由は、戦後ドイツにおける著名なモンゴル

学者ワルター・ハイシッヒ (Walter Heissig) の研究功績を追い求め、戦前モンゴル地域から収集された古い地図や写本などを調査することであった。

ワルター・ハイシッヒ (1913-2005) は、1942年から内モンゴルの広い地域において現地調査を行い、モンゴル文献を大量に収集することに努めた。彼は、戦後のドイツにおいて約半世紀に渡ってモンゴルの歴史、文学、民間芸能などの研究に身を奉じ、大量の研究著作を執筆している。しかし、中国国内において、彼の研究は目を向けられることはなく、1989年に中国語に翻訳された『西藏と蒙古の宗教』(1970年)が知られているのみである。

彼の「民族は歴史を捜し求める」という原題の元に書かれた『モンゴルの歴史と文化』(1964年)という著作は、日本の田中克彦教授によって日本語に翻訳されており、上記の2つの著作とも、モンゴルの宗教関係の研究に取り組んでいる筆者にとって貴重な参考文献となっていたので、ワルター・ハイシッヒの研究功績についてより多くの情報を得ることを以前から考えていた。

その考えと、ハイデルベルク大学のクラスターの研究員のアドバイスを受け、ハイデルベルクの南アジア研究所(SAI)とハイデルベルク大学の図書館にて調査研究活動を進めることにした。この2つの研究所においてワルター・ハイシッヒの著作や編著を40冊余りに目を通すことができた。そして、その著作が書かれた時期は主に1950年代後半から1980年代の間に集中していることが確認できた。1950年代後半の著作では、モンゴルの歴史研究が中心に行われ、14世紀から18世紀までの間にモンゴルで書かれた『十善福徑白史』、『モンゴルのボルジギン氏族の歴史』などのモンゴルの年代記の写本の内容がそのまま著書のなかに翻刻され一部掲載されている。そして彼の1970年代以降の著作においてはモンゴル文学の研究成果が顕著にみられるようになった。そのなかでも特にモンゴルの英雄叙事詩の研究『ゲセル・ハーン (Geser Khan) 物語』や『三歳の赤英雄 (Gurban Nasutai Gunagan Ulagan Bagatur)』などの研究が見られる。

今回の調査で資料を調べているうちに、ワルター・ハイシッヒの著作でも言及されたドイツ人のモンゴル学者ヘルマン・コンスタン (Hermann Constan) の功績に触れる機会があった。ヘルマン・コンスタンはドイツ人の記者の身分を以て1907～1913年の間にハルハモンゴル国(今日のモンゴル国)に滞在し、第一次世界大戦が勃発した際に一度帰国するが、その後1930年から1950年までずっと中国の北京に滞在していた。彼は当時すでに画像撮影の機械を使用し、モンゴルと北京に滞在中は大量な写真を撮影し、現在も約3000枚の写真は



図1 内モンゴルオロス市オトク地域の古地図 (<http://crossasia.org/digital/mongolische-karten>、アクセス5月16日)

個人のコレクションとして保存されていると言われている。これらの写真はまだ公開されていないため、彼が以前発表した資料の中で使ったものしか見られない。また彼は北京滞在中、清朝の末期に作られたモンゴルの各地域の手書きの地図を182枚も収集し、彼の没後すべてベルリンの国立図書館で保管するようになったことが報告されている。近年ようやくこれらの古地図に注目する学者たちが現れてきて、ベルリンの国立図書館は利便性を考慮して、2008年から図書館のサイトに公開している。

これらの地図を見てみると、モンゴルの各地域によってその描き方も異なるが、基本的に山や丘、または川、湖などの地形を基準に作られており、それに王公の住処、お寺とオボーなどの場所は明示されている(図1)。

ヨーロッパの国においてこのようにモンゴル学関係の膨大な研究功績があることは、今回の研究調査で初めて分かった。ワルター・ハイシッヒが1950年代の後半に作成した歴史文献の写本を使用した著作は、筆者が手に取った際には、まだ未開封の状況だった。文化大革命中に大量な文献資料が被害を受けた中国のモンゴル学研究にとって、これらの著作は将来的に貴重な参考文献になると思われる。一方、ヘルマン・コンスタンの集めた古い地図は、ベルリンの国立図書館によって公開されたことにより、今後、景観の持続と変容の視点から、モンゴル地域の地形文化に関する研究に活用できるようになることを願っている。